体験版

# 美少女除霊師（ゴーストスイーパー）は若葉（しょしんしゃ）マーク❶＋❷

夏目（なつめ）　棗（なつめ）

## ❏❏ 目次 ❏❏

❏ Report 1.　奇妙な除霊 ❏　P7

❏ Report 2.　邪島の異能力と共同作業 ❏　P42

この体験版には『美少女除霊師は若葉マーク❶』の冒頭の二つのエピソードを収録しています。

基本的に本シリーズは読切連作ですので、何処から読んで戴いても良いように配慮はしていますが、この体験版にてヒロインと主人公の馴れ初めなどをお読み戴いてから他のエピソードをお読み戴いた方がよりお愉しみ戴けるかと思います。

## ❑❑ 登場人物 ❑❑

●御神霊子（おがみれいこ）＝一八歳。一一月一一日生まれ。身長：１４８㎝、体重：４２㎏、スリーサイズ：９０（Ｄカップ）・５８・９０。血液型ＡＢ型。
本名は「おがみ」だが初対面の相手は名刺を見ると殆ど「みかみ」と発音する。

●邪島忠則（よこしまただのり）＝二〇歳。身長１７５㎝。血液型Ｏ型。『御神霊子除霊事務所』のアシスタント。時給二五〇円から。頭に巻いているバンダナがトレードマーク。

●マリ子（マリ姉）＝身長：１５６㎝、体重：４７㎏、スリーサイズ：７８（Ａカップ）・５６・８０。血液型Ｏ型。『御神霊子除霊事務所』の雑用係。日給三〇円から。十五年前（当時〇六歳）に巫女のアルバイト中に 階段から落ちて死亡。処女だったのが未練となって幽霊となる。霊体であるゆえ 普通の服は着られず、死んだ時に身に着けていた巫女服を着ている。

●田中社長 ＝ 先代（霊子の師匠）に仕事を斡旋してくれていた探偵社の社長。過っては先代の除霊アシスタントもこなしていた業界通で、今でも霊子を心配しては わざわざ除霊の仕事を探してきてくれている。小太りの憎めない〝おっちゃん〟。

●高光陽子（たかみつようこ）＝ 放課後になると『僕も』『僕も』と行列ができるクラスメートでヌキ捲くって鍛えたという《ふぇら》自慢の美少女幽霊。

●マダム幽霊 ＝ 資産家の旦那と死に別れた後、若いツバメを何人も侍らせて遊興に耽った挙句、所謂痴情の縺れで刺し殺された五〇代後半の有閑マダムの幽霊。その体重は三桁に届いていた……。

●蛎崎いづみ（かきざきいづみ）＝ ９６㎝（Ｆカップ）のけしからん膨らみを持つ女子校生幽霊。実は男の娘（こ）。

●　操（みさお）＝輪姦（まわ）されたあげく絞め殺されて、錘（おもり）を括りつけられて海に棄てられた可哀想な美少女幽霊。実は……。

****************************

# ❏ Report 0.　はじめに ❏

****************************

多分、本作を手に取られた方の中には、ああ、と思われる方もいらっしゃる事だろう。ご想像のとおり本作は、かの作品へのオマージュである。キャラクターや台詞廻しに意図的な類似点も多くある。しかし、あくまでオマージュでありパロディではない。為に、言い直すならば相違点にギャップを感じる向きもあるだろうと思う。その辺りを含んで戴いた上で、楽しんで貰えれば幸いである。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

# ❏ Report 1.　奇妙な除霊 ❏

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

過って、経済大国日本において除霊は超ボロいビジネスであった。
社会の安全と経済活動をおびやかす悪霊や妖怪を退治する現代のエクソシスト――それがゴーストスイーパーであった……時代から、早十数年。
東の超大国の経済破綻の煽りを受けて、この国も今や経済不況の真っ只中。過っては超ボロいビジネスだったゴーストスイーパーも、今では斜陽を極めていた――。

＊
＊　＊

「はあああぁ……今月も、赤字ねぇ～……」
御神霊子(おがみれいこ)は事務所のデスクに突っ伏して大きなため息を吐いた。
ナイスバディーの霊能力者にして凄腕の除霊師(ゴーストスイーパー)と謳われた先代からこの事務所を無理矢理受け継がされてから一年余り。銀座の一等地に構えてい

た事務所も、今では高田馬場の雑居ビルに間借りという体たらくであった。
勿論それは『御神霊子除霊事務所』に限った話ではない。何処の除霊事務所も似たようなものであった。
霊子は除霊師(ゴーストスイーパー)としての霊能力は、先代に見込まれただけあって超一級品だったが、何分経験値とセールス能力が不足しており、殊に後者の欠如は致命的であった。それというのも、バブルの時代ならいざ知らず、今や、何処の企業も悪霊などの除霊に多額の費用を費やす経済的な余裕などなかったからである。当然、今や除霊ビジネスは買い手市場なのであった。ダンピングと売り込み合戦に有象無象が犇(ひし)めく除霊ビジネス界にあっては、先代の知名度だけでは最早限界にきていたのだった。

そもそも、霊子の除霊師(ゴーストスイーパー)としての業界デビューはもっと先の話だった筈なのだ。
五歳になったばかりの頃にその霊能力の高さを先代に見出された少女は、以来十余年、深山に籠って修行に明け暮れていたのだった。
そんなある日、深山の修行小屋に一通の電報が届く。何しろ、携帯電話が圏外にな

る非常に稀な地点であった。瀕死の体で、よれよれ、になって辿り着いた配達の小父さんに水と丁寧な礼を言って開いてみれば……。

《〇ツキ〇ヒ十五ジ　ジムショニモドレ　シショウ》

とだけあった。

期日は二日後である。消印を見れば五日前。つまり、配達の小父さんが五日掛かった険しい山道を二日で降りねばならない事を意味していた。

霊子は即座に決断した。着の身着のまま、昼飯に用意した握り飯を懐に収めると修行小屋を後にしたのだった。

――二日後。

霊子がほうほうの体で辿り着いた銀座の事務所には、着飾った男女が犇(ひし)めき合っていた。

「んなあ――――っ!?」

見知らぬ人々が楽しげに歓談する部屋の入り口で、茫然自失の霊子の肩を優しく叩く手があった。

「霊子ちゃん、よく戻ったさあ♪」

「しゃ、社長さーんっ！」

知った顔（先代に仕事を斡旋してくれる探偵社の社長である）を見つけた安堵感から、霊子は大声で泣きだしてしまった。
「ほら、ほら、先生の晴れの日に涙は禁物さあ！」
田中社長から渡されたハンカチで涙を拭いながら訊ねた。
「晴れの日って……」
「今日は、先生の結婚披露宴さあ♪」
「な、な、な、なあ――――っ!!!」
開いた口が塞がらない霊子の耳に懐かしい声が聞こえた。
「霊子ちゃーん♪……良く間に合ったわねーっ、偉い、えらいっ！……流石は私が見込んだだけの事はあるわね～っ♪」
振り返ると、純白のウエディングドレスの裾を上品そうに摘んだ先代が微笑んでいた。
（に、似合わねーっ！）
と、一瞬よぎった言葉を飲み込んで霊子は先代の胸に飛び込んだのだった。
――いや、飛び込む寸前でかわされたのだった、が……。
べしゃっ、と床にキスをさせられた霊子が恨みがましい顔で見返す。

「いやあ、あんまりばっちかったもので、つい……」
平然と笑って先代は言ったものである。
考えてみれば飲まず食わずで二日間、胴衣もボロボロであった。
「先生……」
「なあに？」
「お腹空いた……」
「つたくぅ！ …この子は～っ！ ……そこのテーブルの上の物、好きなだけ食べなさい……」
そう言って先代は霊子を抱き寄せたのだった。
「でも、間に合って良かったわあ……これからハネムーンに出掛けるから、留守番を頼むわね♪」
「んなあ――――っ!? ……って、先生、仕事は？」
「ああ、霊子ちゃんに任すっ！ ……腕試しと思って好きにやっていいわよ♪ ……精霊石や破魔札も好きに使っていいから……ただ、神通棍(じんつうこん)は、まだダメよっ！」
――という次第で二ヶ月後。

世界中を遊び歩いて帰って来た先代が、今度は引退を宣言する。
「南の島を買ったのよっ♪……そこで、ダーリンと楽しく暮らすわっ❤」
「んなあ――――っ!?……って、先生、仕事は？」
「ああ、霊子ちゃんに譲る！……大きくするも良し、潰すも良し、好きにやっていいわよ♪」
――という次第で半年後。
厳しい実戦特訓の後、除霊事務所を霊子に譲った先代は南の島へと旅立っていったのだった。

今にして思えば、野生の勘で今日の不況を見越していたのではあるまいか……ついつい、そんな愚痴が心をよぎる霊子だった。
「はふうううぅうううぅ……」
霊子はもう一度長いため息を吐いて立ちあがると、窓辺に寄って地上を見降ろした。
今や習い性になっている、腰に手を当て胸を反らせ半歩足を開いた先代得意のポーズも、今日は何やら物悲しい。
「ええいっ！…ビンボーなんて大っキライよっ!!」

頭を、ぶるん、と振って長いストレートヘアを背に流すと、かっ、と瞳を見開いて空を見あげた。
「ともかく 利益率を上げなくっちゃ！ ……それには、値の張る精霊石や一枚三〇〇万はする破魔札なんて使えないわね！ ……と、なるとお……」
霊子は、神棚に恭しく供えられていた先代愛用の神通棍を手に取った。
使い込まれた燻し銀に輝く神通棍を、ジャキーン、と高く掲げる。
途端に体温が上昇するのが判った。心なしか頬も紅潮しているようだった。
先代は、霊子にこの事務所の全てを受け渡すに当たって、一つだけ言い含めた事があった。
「この神通棍は、まだ霊子ちゃんには荷が重いと思うわ！」
その日の出来事を思い出して、何故か霊子は誰も居ない事務所で頬を染めた。

その日、先代はこう切りだしたのだった。
「この神通棍はね……う～ん…有体に言えば、体内の性的な力をパワーに変えて放出するのよ！」
「性的な力……」

先代の言葉に、少し頬を染めて霊子が訊き返す。
「そう、例えばオナニーした後って、身体が火照ってだるくなってるでしょう？」
「……」
益々朱くなって俯いてしまった霊子を気にする素振りも見せず先代が話を続ける。
「つまり、えっちな事をしてる時って、それだけ凄い力を発散しているって事なのよね？……だから、その力をこの神通棍に注入して霊を浄化するのよっ！」
「そ、そ、それって……お、お、オナニー…し、し…しながら…じょ、浄化するって…ことです…か……」
「え？……あっ、あはははっ……勿論、しながらでもいいけど…うふっ♪……それじゃあ、力が分散されちゃうわよ？」
「……」
勘違いに、かーっ、と耳まで真っ赤になった霊子を可笑しそうに見遣って先代が笑い残しながら言葉を続けた。
「そうね…うぷぷっ…それを見たら霊が吃驚(びっくり)して隙もできるかもしれないわねっ♪」
「せ、先生っ！」

恥ずかしい勘違いに泣きそうな顔をして霊子が抗議する。
「ま、まあ……要するに普段は眠っているその力を神通棍に注入するって訳よ！……でも、問題は、その後なの……」
笑いを治めて先代が難しい顔をした。
「その後って……」
「当然、凄いパワーを発散するのだから、揺り返しがくるわっ！」
「揺り…返し……？」
「そう、端的に言っちゃうとぉ……ぱんつが、ぐっしょり、濡れちゃうのねっ♪」
「……っ」
何処まで本気の話か訝しむ霊子に先代が鹿爪らしい顔で答えた。
「あら、ホントウよぉ！……だから、必ずぱんつの代えは 用意していかなくちゃ、ダメよぉ♪」
「……」
眉に唾をつけたくなる話に霊子が怪訝そうな顔を返す。
「いや、ホントウだってばぁっ！……それよりも、パワーを抑えればそれ位で済むけれど、フルパワーだったら……」

――ごくっ……

真剣な先代の顔に思わず霊子の喉が鳴った。

「うう～ん……ヴァージンの霊子ちゃんには、その先は、ちょおっとぅ、きついかなあ……？」

「せ、先生っ！……や、やっぱり、わたしを揶揄(からか)ったんですねっ！」

違う意味で真っ赤になって霊子が抗議する。

「違うって！……困ったわね……やっぱり、現場で実際に見せるしかないか……」

思案顔で先代が呟いたその時だった――。

取ってつけたように事務所の扉が開くと、除霊アシスタント代理（本来のアシスタント兼パートナーは現在異国に出張中であった）の田中（本来は、よく除霊の仕事を斡旋してくれる探偵社の社長である）が飛び込んできた。

「先生っ！……仕事だよーっ！」

小太りの身体を揺すりながら入ってきた田中が霊子にも挨拶する。

「あ、霊子ちゃんもお疲れーっ！」

見てくれに似合わず体育会系の男であった。

「それで、どんな現場なの？」

一瞬で戦闘モードに気を引き締めて先代が訊く。
簡単な説明を受けて先代が神通棍を手に取った。
「ちょうどいいわっ！……霊子ちゃんに実際に見せてあげましょうっ！」
「え？……先生、神通棍を使うのかい？」
本来のアシスタント兼パートナーが居ない現場では滅多に使う事がないのを知っているだけに、田中が不思議そうに確認した。
「仕様がないのよ……私も我慢するわ！」
何故か眉間に苦渋の皺を寄せて先代が準備を始める。
「あっ、社長は車の準備でもしてきて！」
「いつでも出れまさっ！」
田中の返事に少し、そわそわ、しながら先代が言い募る。
「い、いいから、ちょっと外で待ってなさいっ！」
唖然としながらも田中が出てゆくと、先代がドレッサーの下の抽斗(ひきだし)を開いた。
いつも、何故、事務所にドレッサーがあるのか不思議に思っていた霊子は、先代がショーツを物色し始めるのを見て漸く先程の話を信じ始めるのだった。

「う〜ん……これかなあ……それとも、こっちか……」
まるでデート前に勝負下着を選ぶような真剣な先代の様子に霊子は知らず知らずに身震いしたのだった。

――そんなこんなで、無事除霊を終えて……。
「先生、お疲れーっ！……でも、こんな雑魚相手に フルパワーだす必要あったのかいな？」
「はあ、はあ、はあぁあん♪……し、仕方ないのよ……んんっ♪……れ、霊子ちゃんに、実際に……はうん……見せておかないとね……」
何故か微妙に内股を擦り合わせるようにして戻って来た先代は、いきなり田中の脳天に神通棍を思い切り振り降ろしたのだった。
――きゅうーっ！
と、擬音でも聞こえそうに頽(くずお)れた田中に先代が、よろよろ、と被さる。
「せ、先生っ！……な、何をっ！」
「霊子ちゃんは、黙って見てなさいっ！」
一喝されて押し黙る霊子を尻目に先代は昏倒した田中のズボンのチャックを降ろし

始めた。
「んなっ!?」
唖然と見降ろす霊子の前で、先代は田中の《ペニス》を取りだし弄りながら惚けた瞳を向けた。
「フ、フルパワーを……はあ、はあ……つ、使うと……男の…せ、精を…ほ、欲しく……あふぅん……な、なるの…よう♪」
タイトなボディコンワンピースの裾を割って先代の指先が己が股間を弄り始める。見遣れば、むっちり、とした太腿には早くも愛液が伝っていた。すぐに指先が濡れて貼りつくショーツを潜り、直に秘唇を弄っても、尚も快感を求めて止まぬ蕩けた顔を見せるのだ。そして、微かな躊躇(ためら)いの後、最早我慢できないという風にとうとう取りだした田中の《ペニス》を頬張ったのだった。
――あむうんっ、じゅるる、ちゅぷ……んぶっ、じゅぷっ……くちゅっ、ちゅぷっ、くぷっ、ちゅぶぶっ……じゅる、じゅぶぶぶぅ……ちゅぶっ、じゅるるるっ……んん、んぐっ……んぶっ♪
唇を窄め卑猥な水音を立てながら一心に吸い立てる様は鬼気迫るものがあった。
――はぶぅ……ちゅぶっ、ちゅぱっ……くぷっ、ちゅぽっ……ぅん、んんっ……ん

ぶっ、ぢゅるるる、ちゅぶぶ……ぢゅる、くちゅるぅ……おぶぅ、ちゅぼっ、じゅるるっ……んぐっ、んぶっ♪

いきなり眼の前で展開される濡れ場に、霊子は両手で口元を押さえ見詰めるばかりだった。

――やがて……。

喉を鳴らして田中の精を吸引し終えた先代が、口端に残る粘液を舌先で舐め取りながら、些か照れ臭そうに霊子を見あげた。

「さっき用意したぱんつを頂戴……」

そして、密閉された部屋の中を念の為とばかり一廻り窺ってからショーツを穿き替えたのだった。

「ふうぅ……」

ひとつ溜め息を洩らし、バツが悪そうに俯いたままの霊子を見遣る。

「判ったでしょ？ ……フルパワーを使うと自分で慰める位じゃ治まらないのよっ！……だから、あの人が居ない時は、あんまり使いたくなかったんだけど……」

「も、申し訳ありませんでした……」

何気に謝る霊子に先代が微笑み掛ける。

「いいのよ、霊子ちゃんの所為じゃないわ……それに、どうせあいつだって、向こうで好き勝手やってるに違いないんだからっ！」
今は異国で出張仕事に勤しんでいる筈のパートナーを思い出して、顔には笑みを浮かべたまま先代のコメカミに、ぴき、ぴき、と怒りマークが浮かんでいた。
普段は『ただの丁稚』だの『生殺与奪の権利は私が持っている』だのと奴隷同然の扱いをしていても、今や傍目も憚らぬ恋人同士――いやオシドリ夫婦なのであった。
「でも、流石にこいつに跨る気にはなれないしねぇ……」
釣られて田中を見た霊子が慌てて視線を逸らす。
すっかり萎んだ《ペニス》がズボンから顔をだしたままだった。
仕方なさそうに先代が田中の股間を収めるのを眼の端で、ちら、ちら、見遣りながら霊子が心配そうに訊いた。
「あ、あの……田中社長さんは、この事……」
未だ昏倒したままの田中を心配してか、それとも今の行為の発覚を恐れてか、曖昧な声音だった。
「心配ないって、何も覚えちゃいないから……それでも、今はまだパワーをマックスまで挙げなかったけど、流石にそこまで挙げなきゃ倒せない霊だと……そりゃあもう、

後が タ・イ・ヘ・ン♪……もう、この除霊の現場が途端にＡＶの撮影現場に早代わり……ってなモンよ♪」
含み笑いながら霊子を見ると、真っ赤な顔で俯いてしまった。
「まあ、これを使うのは、霊子ちゃんに合ったアシスタント(こいびと)を見つけてから…ねっ♪」

「……」
あの日の現場を思い出し、霊子は誰も居ない事務所の中で一人赤面するのだった。
その後、幾たびか先代と二人切りの現場で、霊子は神通棍のパワーを抑えた使い方を学んだのだったが、初めて使った時は、泣きながら先代の指で慰めて貰った事を思い出して、またも頬を真っ赤に染める霊子だった。
「だ、大丈夫…よ……た、たぶん……」
もう一度、神通棍を高く掲げて独りごちた、その時――。
キィ――っ、とドアが軋んで一人の青年が入って来た。
(……今時、ティーシャツにジーパン、ぼさぼさ髪にバンダナって……ダサっ！)
それが霊子の青年への第一印象だった。

が、何故かそのバンダナ青年が一点を見詰めて怯えたような顔をした。その視線を辿った霊子は、慌てて振り翳したままだった神通棍を降ろして背後に隠し、引き攣った笑みを浮かべた。

「あっ、あはははは、ははあ……」

些か幼さの残る顔立ちに似合わぬ、ぼん、きゅっ、ぼん（死語？）、な身体のラインを、くっきり、と浮かびあがらせたタイトな極超ミニのレザー・ワンピースに包まれた霊子の肢体を、バンダナ青年は眩しそうに見遣った。

霊子が先代譲りなのは霊能力だけではなかった。上から９０（Ｄカップ）・５８・９０というスリーサイズは図ったように師匠と同じサイズであった。ただ、惜しむらくは身長が師匠と比べ壊滅的に足りず１４８㎝と小柄だった事。その為、師匠が「好きなのを使って良いから」と残してくれた『戦闘服（ボディコンワンピース）』は何ともサマにならなかった。それに、如何にファッションに疎い霊子でも、流石に時代遅れのボディコンワンピースは袖を通す気になれず、レザーのライダースーツの裾を捲りあげて『戦闘服』にしたのだったが……。

それを見た田中社長が「裾を直してきてあげるさあ」と言って翌日戻ってきた師匠のお下がりのライダースーツは、何故かショーツが見えそうな股下０㎝の極超ミニの

ワンピースになっていたのだった。
「こ、こ、これじゃあ……ぱ、ぱぱ、ぱ、ぱんつが……み、み、見え……」
霊子が途惑いを口にする横で出立前の師匠が言ったものである。
「平気よぉ♪……そうだわっ！…独り立ちのお祝いにぃ、『見せ下着』を、たっくさん買ってあげるから、バン、バン、魅せてやりなさいっ❤」
劃して、霊子の『戦闘服』はマイクロミニのレザー・ワンピースに決定させられたのであった。
「う、うんっ！……どんな御用かしら？」
自分の身体に注がれる無遠慮な視線には未だ慣れない霊子が、咳払いなど絡めて努めて冷静に問い掛けた。
霊子の肢体に見蕩れていたバンダナ青年が、はっ、と我に返ったように口を開く。
「あ、あの……みかみ、れいこ、除霊事務所って、ここでいいんすか？」
一瞬、ぴくっ、とコメカミに青筋を浮かべた霊子だったが、すぐに営業スマイルをその美しい顔(かんばせ)に貼りつかせて、いつもの説明をするのだった。
「『御神』と書いて『おがみ』と読みます、『みかみ』ではなく『おがみ』ですっ！……除霊のご依頼でしょうか？」

「あっ…ええと、これなんすが……」
何とも、ぱっ、としない風体のままのようなハッキリしない態度に、苛立ちを必死に隠して霊子は青年が差しだした紙切れを受け取った。
広げて見ればそれは、一年前この高田馬場に都落ちした折、近場の大学や予備校に配ったアルバイト募集のチラシであった。最近ではアルバイトを雇う余裕もなく、尤も応募してくる者もなかったのですっかり忘れていたのだった。
「ああ、ゴメンね…今は……」
霊子が断りの言葉を探して言い淀んだ、その時――。
――どげっ！
と、ドアを乱暴に開いて田中社長が飛び込んで来たのだった。
「霊子ちゃん、仕事だよーっ！」
が、見知らぬ青年が一緒に居るのを眼にした田中が、にま～っ、と相好を崩した。
「おや～あ、霊子ちゃんてば、こんな処で 逢引きかい？ ……ふうん、隅に置けないねえ♪」
「しゃ、社長さんっ！ ……そんなんじゃ、ありませんっ！」
むきになって否定する横で、バンダナ青年はその男がこの事務所の社長だと勘違い

して頭を下げた。
「あっ、俺…除霊アシスタントのアルバイトに 応募してきた…よ、邪島忠則(よこしまただのり)っす！ …宜しくお願いしまっす！」
「おお、そうか、そうか……じゃあ、君も一緒に来るかい？」
そうマイペースで話を進めて、田中は勝手知ったる何とやら、部屋の隅に用意してある除霊の為の道具を収めたバッグを取るとバンダナ青年に手渡した。
「ほれ、君が持つ！」
そして霊子を振り返った。
「先生、行くよぉ！」
アルバイトの手前、殊更霊子を『先生』などと呼んでみせる。田中は見た目に似合わず気配りな男であった。
「さ、先に降りていて下さい…すぐ追いつきます！」
微かに頬を染めて霊子が答えた。
『先生』と呼ばれたのが恥ずかしかったのか、いきなりバンダナ青年も同行する展開に途惑ったのか……。いや、実際は替えのショーツ選びが恥ずかしかったのであるが……。

現場に向かう車のハンドルを握って、田中が今回の依頼に就いて説明を始めた。
「今回のは、政治家さん絡みの、ちょっとしたヤマさあ♪」
そして、声を顰(ひそ)めて続けた。
「何でも、政治家さんや高級官僚専門の高級娼婦だったって話さ……依頼してきたのも名前を言うのも憚られる政治家の私設秘書さまだあね……だから、うんと吹っ掛けてやったさあ♪」
そう言って田中は助手席の霊子にだけ見えるように指を立てて見せた。
「だから、今回は……それ、使わなくてもいいと思うよ……」
ちらっ、と霊子の手の中の神通棍に視線を投げて言ったのだった。霊子が必要経費に腐心しているのも、神通棍を使った後の苦しそうな様子も、よく承知している田中だった。
(でも、神通棍を使った後の霊子ちゃんって、めっちゃ、色っぽいんだよなあ……先生が使った後は、何でか良く覚えていないんだが……)
そうこうする内に現場に着くと、取り壊しの決まった廃ビルのようだった。
「このビルを爆破して解体するんだが、もう予定日を過ぎてるのに準備がちっとも進まないんだと……」

一歩、廃ビルに足を踏み入れて霊子の顔にも緊張が走った。
「確かに、感じるわね……その高級娼婦さんの霊かしら？」
「流石だねえ……わしは何も感じないけどねえ……」
そう言いながら、ふと、振り返って呆れたような声をだした。
「おい、おい、バンダナ君……もうビビっちまったのかい？」
「い、いえ……だ、大丈夫っす！」
空元気で答える邪島を見て、田中が思い当たったように大声をあげた。
「そうかあ、何か見覚えがあるような気がしてたんだが……先生の旦那さんの若い頃にそっくりなんだよ！……ね、霊子ちゃんもそう思わないかい？」
「そうかしら？」
言われて振り返った美少女に、まじまじ、と見詰められて邪島が恥ずかしそうに訊いた。
「お、御神さんって……け、結婚してたんすか？」
「ば、莫迦な事言わないでよっ！……わ、わたしはまだ独身よっ！……ってか、そんな歳じゃないっつうのっ！」
霊子は怒ったように、ぷいっ、と向こうを向いてさっさと歩き始めてしまった。

それを、田中がフォローしながら説明する。
「ごめん、ゴメン……霊子ちゃん先生じゃなくて、そのまた先生って言うか……まあ、大先生って処かなあ……でも、きっと霊子ちゃん先生とバンダナ君なら、いいコンビになるような予感がするなあ……」
「し・ま・せ・んっ!!」
取りつく島もない霊子だった。
「そ、そうそう……この幽霊さんだけど……」
慌てて田中が話題を変える。
「…詳しい話は教えて貰えなかったけれど……どうやら、ここに新しくできるビルの最上階にオープンする予定のね、会員制のクラブのママの座に関わるトラブルらしいのさあ……」
探偵社などやっている所為か、ゴシップネタには詳しい田中だった。
「すっげえ、美人で……その上、素っ裸で現れるってんで…ちょっと話題にもなってるさあ……で、このビルのオーナーが…例の名前をだすのも憚られるお人で…あまり噂が広がらない内にって……」
「まあ、今回は久々にボロい仕事みたいだから、精霊石や破魔札も使えそうねっ❤」

謝礼の額を思い出して霊子の機嫌も直ったようだった。
エレベーターの止まった廃ビルの階段を登りながら、最上階まで徒歩で登らねばならないのかと、三人が些か途方に暮れ始めた時、霊子が短く叫んだ。
「居るわっ！」
どうやらその階はミニホールだったようで、部屋の奥に舞台があり、手前に扇方に三〇〇程の客席が設えられていた。
「変ねえ……」
足を一歩ミニホールに踏み入れた瞬間、霊の気配が、ふっ、と掻き消えたのだ。
霊子、田中、邪島の順で用心深く客席の間を進み、とうとう舞台袖まで来てしまった。
あまり気にした風もなく舞台袖の階段を登る霊子に田中が声を掛ける。
「れ、霊子ちゃん……大丈夫かい？」
「うん……気配が、すこん、と消えちゃったのよ……」
階段を登り終え、すたすた、と舞台中央に進む霊子に、おっかなびっくりの二人の男が続く。
舞台中央の、盛時ならばスポットライトが当たっていただろう位置に、すっく、と

霊子が立った。
「聞こえるっ!?　悪さすんのもいーかげんにしなさいっ!!　おとなしく成仏すればよしっ！　さもないと力ずくで片づけるわよっ!!」
霊子が神通棍を高々と掲げ、先代譲りの口上を詠いあげる。
その瞬間だった。
――ドゴォオオオオオンッ！　バリバリバリッ!!　ドガシャアアアアアアアアンッ!!!
と、強烈な霊気が稲妻となって三人を襲い、舞台袖まで物の見事に吹き飛ばされてしまった。
ぱっ、と飛び起きすぐに体勢を取り戻した霊子が短く叫ぶ。
「一旦、退くわよっ！」
ヒールの高いパンプス（身長の低さをカバーする為履いているのだが現場向きとは言い難かった）を脱ぎ捨てると短い階段を駆け降り背後の客席のシートの陰に退散した霊子と田中は、その時初めて邪島が居ない事に気がついた。慌ててシートの背から覗くと、先程の場所に固まったように動かない邪島がいた。その邪島のすぐ前に、霊気の塊のような仄白く輝く光点が浮かんでいる。

「邪島クンっ！…何してるの、こっちよっ！」
「お、御神さ～ん……か、身体が硬直して…う、動けないっすーっ！」
「ったくぅ！」
霊子が神通棍を握り直して一歩前に出ようとするのを田中が止めた。
「待って、霊子ちゃんっ！」
「でも、助けないとっ！」
「だから、ちょっと待って、見てごらんよっ！」
田中の言葉に改めて舞台に眼を向けると、確かに先程までの凄まじい霊気は失せていた。
そして、光り輝いていた霊気の中心が何かを形作り始めていた。
やがてそれが美しい曲線を持った女性の身体に固まってゆく。しかも、艶かしくも素っ裸であった。
「ぐびっ……」
隣で霊子の肩を抑えていた田中の喉が鳴った。
女の霊子から見ても、眩いばかりの美貌とプロポーションを備えた女幽霊だった。
あまりの展開に固まったように見詰める二人を尻目に、美貌の女幽霊は邪島の前に

傅くように膝を折るとゆっくりとズボンのチャックを降ろし始めるのだった。
「んなっ!?」
慌てて口を押さえた霊子がもう一度踏みだそうとするのを、田中がまた留めるように囁いた。
「大丈夫……邪気は感じられない……それに、もう少し様子を見て…その、なんだ…ちゃ、チャンスを…ま、待とう……」
確かに田中の言うとおり、邪悪な気配はおろか霊気も不思議なくらい静まっている。
過って先代の除霊アシスタントもこなしていた田中の言葉を信じて霊子は神通棍を降ろすと、再び邪島と美貌の女幽霊を見遣った。
「ひっ！」
またしても口を押さえて悲鳴を飲み込む。
美貌の女幽霊が取りだした邪島の《逸物》が光り輝いてそそり勃っていた。男性経験の皆無な霊子にも、《それ》が異様に大きいのは見て取れた。
慌てて視線を落とす霊子の横で田中の上擦った声があがった。
「で、でけええっ！ ……おおぅ……あの舌遣い……み、見てごらんよ、霊子ちゃん……ほぁあ……あの《巨根》を、ぱっくり、呑み込んじまったっ♪」

完璧にデバガメ親父に成りさがった田中の、先程の言葉を信じた自分を呪う霊子であった。
しかし、すぐに奇妙な違和感を感じて考え込む。
もう一度、そっと田中の横から覗いてみた。
「おっ、霊子ちゃんも見るかい？」
田中が気を利かせて霊子に場所を空けてやった。
（そうじゃなくてーっ!!）
恥ずかしそうに邪島と女幽霊を見て、はた、と気がついた。
「社長さんっ！……何であの幽霊は邪島クンに触れるんですかっ！」
「おおぅ！……あの裏筋を舐めあげる舌先のイヤらしい蠢きはどうよ……って、ほへぇ？……そ、そう言やあ……」
一瞬、霊子の言葉に意識を向け掛けた田中だったが女幽霊の動きにまたも視線をさらわれる。
「くぁーっ！……股をおっぴろげて自分で弄り始めたぞっ♪……おおほぅ♪……まだ綺麗なピンク色だあ♪」
（だ、ダメだこりゃっ！）

「おおぉおっ！……霊子ちゃんの彼氏、あんなに蕩けた顔しちまって 気持ち好さそうだなあ♪」
「だ、だから、彼氏じゃありませんってっ！」
「え？……そうだっけ？……まあ、大目に見ておやりよ……女幽霊とヤレルなんて、一生に一度あるかって貴重な体験なんだからさあ……」
「だからーっ！……それが変だと言ってるのっ！」
「へっ？」
「だ、か、らっ！……何であの幽霊は邪島クンに触れるんですかっ！」
「う～ん？」
流石に異常事態に気がついた田中が天を仰いで考え込む。
このまま視線を戻さないよう祈った霊子の思いが通じたのか、田中は暫く中空を睨んで考え込んでいたが、はた、と手を打って霊子を振り返った。
「これは、間違いないっ！」
田中が奇妙に確信めいた言い方をした。
「以前、先生から聞いた事があるんだ……。己の《巨根》を《神通棍》と為し、そこから迸る体液を以って女幽霊を浄化する、いや正しく昇天させる伝説の導師がいた…

…と……」
眉に唾をつけたくなる話であった。
「もしかしたら、彼にはその才能が秘められているのかも……」
（あ、あり得ないーっ!?）
「でも、もしそうなら……こりゃあ、願ったり適ったりじゃないかっ！」
「はあ？」
「考えてもごらんよ、タダだよ…た、だっ！……除霊経費が、さっ！」
「あっ！」
咄嗟に霊子の頬が緩む。
「も、もう少し……よ、様子を見ましょうか♪」
「おおぉおっ！……霊子ちゃんの彼氏、あんなに腰を振って、すっげーぇ 気持ち好さそうだなあ♪」
「だ、だから、彼氏じゃありませんってっ！」
同じような遣り取りを繰り返して二人は暫く見入ってしまったのだった。
やがて邪島と女幽霊の動きに忙(せわ)しなさが見え始める。
「いよいよ、女幽霊の方もラストスパートに入ったな……おおぉ……あんなに、おま

んこに指突っ込んで、ずぼ、ずぼ、やりながらも、咥えた《巨根》にもバキューム・フェラを繰りだす……み、見事なテクニックだあっ♪」

興奮して実況中継をする田中に、聞いている霊子の方が恥ずかしさに頬を染めていた。

「あっ、いよいよだよっ！……霊子ちゃん、いよいよだっ！」

何が『いよいよ』なのかは、初心な霊子にも判って益々顔をあげられないのに、田中がお節介に解説する。

「ほら、ほら、もうイクねっ！……彼氏も、もう限界だっ！……腰が浮いてるよぉ……カク、カク、突きあげて……射精(で)るねっ……ああ、射精(で)るよっ……霊子ちゃん、世紀の瞬間を見逃しちゃあダメさあっ！」

（な、何が『世紀の瞬間』よぉ！……まさか、さっきのヨタ話を、信じてるんじゃ……）

俯いたまま耳さえ塞ぎたい霊子の腕を田中が掴んだ。

「み、見てごらんっ！……女幽霊の身体が透けていくっ！」

「え？」

感極まったような田中の声に思わず顔をあげた霊子の眼にも、はっきり、と判った。

恍惚の表情を浮かべて、あれ程艶かしい肌色をしていた女幽霊の身体が透き通ってゆく。

その刹那、邪島が最後とばかりに腰を突きあげた……。

――どぴゅっ、どぴゅうっ!!　びゅるる、びゅくんっ、びゅるるるぅ!!　びゅるるんっ、どぴゅっ、びゅくんんっ!!

一体、どれだけ射精(だ)すのかという程に、邪島は腰を震わせ続け、透き通ってゆく女幽霊の喉から胃に向かって白濁液が降りてゆくのさえ見通せた。

次の瞬間、全てを放出し尽くした邪島の身体が、くたっ、と頽(くずお)れたかに見えた。あり得ない事だが、殆ど透き通ってしまった女幽霊が両手を差し伸べて、その邪島の身体を抱き留めたように見えた。それから、極上の笑みを浮かべて邪島の唇に感謝の口付けを残すと、次の瞬間――黄金色に輝く光点を散らして、美貌の女幽霊は掻き消えたのだった。

眼の前で起きた事が現実なのか、それとも幻でも見たのだろうか……霊子と田中は暫く呆然と女幽霊が居た筈の空間を見詰めていた。

どれ程の間そうしていただろうか。あるいは数瞬の事だったかも知れない。

「本当だったんだ……」
搾りだすように田中が言葉を吐きだした。
俄かに田中の説を信じる事はできなかったが、確かに、霊子が霊感のアンテナを広げて辺りを探ってみても、この廃ビルの中に霊の痕跡は皆無だった。
「う、ううん……」
その時、邪島の呻き声が聞こえ、霊子が避難所から飛びだした。
「邪島クンっ！…大丈夫っ!?」
階段を一段飛ばしで駆け登り駆け寄る霊子を見て邪島が、よろよろ、と身体を起こす。
「御神さ～ん、助けてくれたんすね～♪」
「大丈夫だった？……何ともない？」
両手を広げて駆け寄った霊子の足が、ぴたり、と止まる。
「え、ええいっ！……寄るなっ!!　触るなっ!!……そ、その小汚いモノを、わたしに近づけるなーっ!!」
よろよろ、と立ちあがった邪島のズボンの股間から食みだした、すっかり項垂れて縮こまった《逸物》に霊子の蹴りが入っていた。

「むぎゅうっふ！」
情けない悲鳴を残してまた頽(くずお)れる邪島を遅れて駆けつけた田中が抱き留める。
「いやーあ、イイもん見させて貰ったよっ！」
邪島の《逸物》をズボンに収めてやりながら田中が感激したように声を掛ける。
「…幽霊と人間が乳繰り合う現場なんて、一生に一度、お眼に掛かれるかどうかって代物だからねえっ！」
邪島の肩を抱いて、ぽん、ぽん、と叩きながら耳元で小声で囁いた。
「処で、幽霊のフェラチオってヤツは…どんな感じだったい？」
「い、いや…お、俺…最初はビビり捲くっていて、何が何だか……」
「そうか、そうか……まあ、それは今夜にでも飲みながら、じっくり、聞かせておくれよな……」
そして霊子を振り返って言った。
「今夜、彼の歓迎会をやろう……わしが席を用意するから……」
「い、いえ……まだ、採用すると決めた訳では……」
途惑う霊子に田中が呆れたような声をだした。

「なあに言ってるのさあ……こんな『お宝』を持った彼氏は大事にしなくっちゃ♪」
「だ、だから、彼氏じゃありませんってっ！」
「え？ ……そうだっけ？ ……ま、まあ、それはそれとして…」
と、邪島の股間を、ぽん、と叩いて続けたのだった。
「…この『お宝』で、これからも霊子ちゃんを助けてやっておくれよ？」
「しゃ、社長さんっ！ ……知らない人が聞いたら 変に誤解をするような言い方をしないで下さいっ!!」
霊子が頬を染めて叫んでいた。

＊

そんなこんなで、邪島忠則の『御神霊子除霊事務所』への就職が有耶無耶の内に決定したのであるが……はて、さて。

*************************

## ❑ Report 2.　邪島の異能力と共同作業 ❑

*************************

「邪島クンっ！ ……今回も、その、取り敢えず……あ、あの…さ、さ、作戦で 行くわよっ！」

現場に到着し、依頼主の婦人から事情を聞き終えた御神霊子(おがみれいこ)と邪島忠則(よこしまただのり)は、二階にある自殺したという依頼主の娘の部屋の前まで来ていた。

自殺という事で内々だけで葬儀を済ませたのだが、初七日を過ぎた頃より、この娘の部屋から啜り泣きのような声が聞こえるのだという事だった。自殺の原因に就いては母親は余り多くを語りたがらなかったが、どうやら失恋を苦にしての自殺らしかった。あるいはイジメだろうか……まあ、何にせよ啜り泣き程度の事であれば、それ程大事にもなるまい――と、霊子は高を括っていた。

「あの作戦……って？」

今日が二度目の現場の自分に『あの作戦』もないだろうと邪島が怪訝な顔で訊き返すと、何故だか霊子は頬を染めて曖昧に答えた。
「だ、だから……前回、何となく上手くいったし……今回も女子の幽霊だし……悪霊でもなさそうだし……あ、あの時と同じように……あ、あんたの…あ、アレ…を……ごにょごにょ……」
語尾を微妙に濁す霊子に、邪島が嬉しそうに鼻の下を伸ばして答えた。
「ああ……俺のチンポを、除霊対象の幽霊の口に突っ込んで、フェラしてもらって、その隙に御神さんが神通棍で……」
――ごいんっ！
ノーステップで邪島の顎に拳固をめり込ませて、霊子は階下に待たせてある母親に聞かれなかったかと気を揉んだ。
「あ、あ、あんたはっ！…そ、そゆうコトは…こ、事細かに述べんでいいのっ！……ったくうっ…すけべっ！」
「いや、作戦に間違いでもあったらいけませんので……俺としては、より詳細な確認が必要かと……」
耳まで朱くなった霊子の顔を覗き込むと、ぷいっ、と視線を逸らしてしまった。邪

島が未だにあの時は霊子が神通棍で女幽霊を浄化して自分を助けてくれたのだと信じ切っている事に、些かの後ろめたさを覚える霊子だったのだ。

「……」

「でも、それには先ず、俺のちんぽを勃起させなければならない訳で……」

邪島が図に乗って言い募ると、更に頬を染めて霊子が吐き捨てるように言った。

「だったら、向こう向いて、さっさと……そ、その…し、し、し、扱けば…い、いいでしょ？」

「しかしですね、俺の身体はもう硬直していて、指一本動かせないんすが……」

そうなのだ。何故か邪島は霊の存在を間近に感じると身体が硬直してしまうようなのだった。霊子自身、霊感は他人よりかなり秀でていたのだが、まだ部屋の中からの霊の存在は朧げにしか感知できないでいた。ある意味、重宝な『霊探知能力』とも思えて、霊子が邪島を採用した理由の一つでもあったのだが……。

しかし、邪島のもう一つの、まだ未確定の能力――『霊魂を浄化する精液』（田中社長の話を鵜呑みにした訳ではなかったし、霊子はまだ半信半疑だったが、本当であれば経費節約間違いなしなのだが）――を発動させる為には……。

「……うぅ、う……」

「ここは、やはり御神さんのその白魚のような指で……」
「却下っ！」
「は、はやっ……」
霊子の瞬答に一旦は怯んだものの、そんな事で諦める邪島ではない。
「ですが、所長自ら決めた作戦を簡単に撤回するというのは如何なものかと……」
殊更『所長』などと呼んで義務感を刺激する。
「わ、判ってるわよっ！」
霊子は、ちらっ、と邪島の股間に視線を泳がせてから疑いの眼差しで訊いた。
「あんた、ホンっとーに、指一本も…動かせられないんでしょうね？」
「勿論っす！……この部屋の中に少女の霊が居るのは間違いないっすよ！……所長だって、感じてるんでしょう？」
「あ、当たり前じゃないのっ！……ビシ、バシ、感じてるわよっ！」
邪島自身は、実は霊の存在を実感している訳ではなかった。というより、前回は初めて目の当たりにした幽霊にビビったあげく身体が硬直してしまった、というのが本当の処だったのだ。確かに今も、霊が扉の向こうに居るかも知れないという事実に身体が緊張しているのは間違いないが、動かそうと思えば前回ほど硬直している訳でも

なかったのだ。
　しかし、邪島の『桃色脳細胞』は、身体よ硬直せよ、と命じていた。
「やはり、ここは、所長の御神さんとアシスタントの俺とが、心を一つにして共同作業に当たるべきだと考えるっす！」
「くうぅううっ……！」
（な、なんでわたしが、こんな奴の…あ、あれを……）
　除霊アシスタントと言えば『下僕』と同義語である。それは、師匠を見れば歴然であった。常日頃から『ただの丁稚』だの『生殺与奪の権利は私が持っている』だのと奴隷同然の扱いをしていたし、それは結婚した今も変わらない。尤も、それがかなり偏った特殊例を鵜呑みにしている事に霊子は気づいていなかったのであるが……。
　かなり迷った挙句、霊子が根負けしたように漸く口を開いた。
「き、綺麗に…あ、洗って…あるんでしょうね……」
「も、勿論っす……いつ何時、御神さんから求められてもいいように、昨夜、丁寧に洗っておいたっすっ♪」
「誰も、求めてないっちゅーにっ！……うううう……でもう、それから…と、トイレだって……ううっ…な、何か、消毒する物は無いかしら？」

「だったら、御神さんの唾液で消毒して下されば……」
「ああ、そうね、唾液には消毒効果があるものね……つまり、私が舐めればいい訳だ……」
邪島が思わぬ展開に期待に眼を輝かして、こくこく、と肯く。
「…なんて言うと思ったかっ！……この、変態っ!!　助平っ!!　色情狂っ!!」
「……っ!?」
三連続の罵り言葉に邪島が身を竦ませた。
「あ、あんたの腐れち、ち、ち……ちんぽ……なんて…わ、わたしの手でも勿体なくて涙がちょちょ切れるってもんだわよっ！」
しかし、何かを吹っ切るように霊子は早口でそう捲くし立てるといきなり、むんず、と邪島の股間をズボンの上から握り締めたのだった。
「あへぇっ♪」
締まらない声をあげた邪島に霊子が微かな期待を込めて訊く。
「な、なによう……ズボンの上からでも気持ち好いのぅ？」
慌てて顔を引き締めて邪島が言い募る。
「い、いえ…いえ…全然っす！……や、やっぱり、直に握って戴かないと……」

「わ、判ってるわようっ！」
恥ずかしさを堪えるようにぞんざいに答えて、霊子は邪島のチャックを降ろした。
期待に顔をだらしなく崩した邪島を、ちらっ、と見遣って霊子の指が邪島のブリーフの窓を潜る。
（ひょ、ひょえええぇっ！……に、握っちゃったわよぉ！）
生暖かい、ふにゃっ、とした感触に霊子が背筋を慄かせる。見掛けはタイトな極超ミニのレザー・ワンピースときつめのメイクの霊子だが（これは先代譲りの衣装であり、それが正しいゴーストスイーパーの『戦闘服』だと霊子が信じていたからなのだが）中身は初心なティーンエイジャーなのだった。
「おはぁあああっ❤」
一方、邪島の顔は益々崩れ、鼻腔が開いているのが見て取れた。
（な、なによう……握っただけで気持ち好さそうな顔しちゃってぇ……）
霊子は邪島のだらしなく崩れた顔を盗み見ると、奇妙な昂ぶりを覚えながら手指で握った《それ》を取りだしたのだった。
「ほ、ほら……だ、だしたわよ！……こ、これで、いいんでしょ？」
握った掌の中で《それ》が微かに硬度を増しているように感じられて、恥ずかしそ

うに視線を逸らせた霊子が言った。
「じゃ、じゃあ……扱いて下さいぃ♪」
霊子は《それ》を取りだした事で一仕事終えたように気を緩めていたのだったが、勿論それで終わりの訳はなかった。
「わ、判ってるってばっ！」
一々指図される事に少々苛立ちを覚えて霊子は、ごり、ごり、と乱暴に《それ》を扱き始めた。
「い、いて…いて…い、痛いっすようっ！」
「あっ…ご、ごめんっ！　……強過ぎた？」
侘びの言葉と一緒に思わず手元を見てしまった。
（ひ、ひぃいいいいいいっ！）
折角見ないように眼を逸らしていた霊子だったが、自分の掌の中で半勃ちになっている《それ》を、まじまじ、と見てしまった。
一旦、眼にしてしまえば興味の方が強くなる。霊子もそんなお年頃だった。何せ、少女期から思春期の入り口までを――つまり、ホンの二年前まで――男の「お」の字も無い深山で修行に明け暮れていたのだったから。

「ホント、ごめん……ちょっと、赤くなってる…かな？」
間近に顔を寄せられ、呼気まで掛かって、邪島の方が逃げ腰になる。
まだ、二擦りか三擦りしかして貰っていないのに、ここで勃ってしまっては余りに勿体ないというものだ。
「……思ったより、可愛いのね♪」
顔を寄せたまま邪島の足元に膝を折って、握った《それ》を観察するように見詰める霊子だった。
しかし、《それ》を『可愛い』と言われた邪島は些か憮然として霊子を見降ろした。
『可愛い＝小さい』と言われたように感じたのだが、見降ろす視線の先に片膝突いた霊子の股間が眼に入る。
タイトな極超ミニの裾が捲れあがり、歳に似合わぬ、むっちり、とした太腿のその奥に黒いレースのショーツが微かに覗いていた。
（う、うわぁああっ♪……お、御神さんの…ぱ、パンティ♪）
当然、むく、むく、と霊子の掌の中で《邪島》が伸びあがる。
（や、やだ……か、硬くなってきた……）
掌に伝わる熱さに、どぎ、まぎ、しながら霊子はゆっくりと扱き始めた。

「んんっ♪」
気持ち好さそうに鼻を鳴らす邪島を見あげると、何故だか彼は慌てて視線を逸らした。
ふと、気づいて霊子は自分の股間を確認して膝を合わせる。
「スケベっ！」
「い、いや…ち、ちらっ、と……しか……」
「べ、別にぃ……見せ下着だから……み、見られても…ど、どうってコト……な、ないわよぉ……」
師匠から無理矢理プレゼントされた『見せ下着』に、恥ずかしさをひた隠して強気に嘯(うそぶ)く霊子に、邪島は心の中で毒づいた。
（さ、先に言って欲しかったっす！）
今更視線を戻すに戻せない邪島だった。
「さあ、これっくらい硬くなればオーケー……よね？」
手を離し、すっ、と立ちあがった霊子はポシェットから濡れティッシュを取りだすと丁寧に掌を拭い始めたのだった。
些か不満気な邪島に、構わず霊子が急きたてる。

「行くわよっ！」

扉を開けて邪島を押し込むようにして一歩部屋に足を踏み入れた瞬間、強烈な霊気が二人を包む。

「居るわねっ！」

ズボンの前を割って、にょきっ、と《逸物》をそそり勃てる邪島の背後から、霊子が虚空を睨み値踏みするように言った。

「邪悪な感じはしないわね……」

そして、いつもの口上を詠いあげる。

「聞こえるっ!?　悪さすんのもいーかげんにしなさいっ!!　おとなしく成仏すればよしっ！　さもないと力ずくで片づけるわよっ!!」

少し間があって、些か拍子抜けする可愛い声が抗議するように聞こえた。

「べっつにぃ、悪さなんて、してないもん……」

そして、すーっ、と少女幽霊が二人の前に姿を現したのだった。

「……って言うよりぃ…それって、何のジョークぅ？」

長い黒髪を背に流しセーラー服を、きちっ、と着こなした細面の美少女が邪島の股

間を興味深くねめている。
「こ、これは……」
邪島の背後から半歩前に出た霊子が、むんずっ、と《逸物》を握り締めて言った。
「…あんたを浄化する、ありがた〜い……じ、神通棍よっ！」
先程まであれ程触るのを嫌がっていた《逸物》を、ぐいっ、と美少女幽霊の顔に向けて狙いを定める。
「ぷぷぅうっ！……おちんちんが、わたしを成仏させてくれるのぉ？」
「お、おち…おちん……って！」
途端に霊子の頬に朱が挿して握る指先に動揺が走った。
「お、御神さん…まず、彼女の言い分を聞いた方がいいっすよ……」
「そ、そうね……」
少女の口から平然と零れた《固有名詞》に些か動揺していた霊子は、アシスタントの助言にも素直に頷いていた。
「…何か、この世に怨み辛みがあるなら、聞きましょう？」
「ねえねぇ……それよりぃ…このおちんちん、立派ねぇ♪……こんな 大(おっ)きいおちんちん、初めて見たぁ❤」

美少女幽霊は霊子の問い掛けをスルーして、ふわふわ、と漂うように邪島の股間に顔を寄せ、うっとり、と《逸物》を見詰めた。
「気持ちイイんでしょうね？　……羨ましいぃ❤」
霊子を見あげてそう訊くのだった。
「な、な、何の…は、話を…し、してるのよっ！」
「だから～ぁ……この、大(おっ)きなおちんちんでぇ、おまんこをぅ、突きあげられたらぁ……気持ちイイんでしょ？」
「わ、わ、わたしに……き、訊かないでよっ！」
「えーっ？　……だって、このおちんちん、お姉さんの《もの》でしょう？」
『おちんちん』を連発する美少女幽霊に、たじたじ、になりながら霊子が強く否定する。
「ち、違うわよっ!!」
心なし握る指先が、今更手放すに手放せないという風に、些か覚束ない。
「ええ？　……お姉さんのカレシじゃないのぉ？」
「違いますっ!!」
今度は瞬答だった。

仲良く手を繋ぐ恋人同士のような風情で邪島の《逸物》を握る霊子の顔を覗き込んで、美少女幽霊は「ふ～ん」とだけ答えた。
「それより、この世に残した未練は何なの？」
霊子が眼力(めぢから)を入れて問い直す。
「未練？……う～ん、あたしぃ……別に、自殺とかじゃ、ないのよね……」
対して美少女幽霊は飄々と答えた。
「でも、失恋を苦に睡眠薬を大量に飲んで……それが死因だと……」
霊子が今回のレポートを取りだして確認する。
「あはっ♪……それ、違う、ちがう～っ！」
「違うって……まさか、自殺に見せ掛けた殺人っ！」
「やっだーっ！……それこそ、まっさかぁ、だわ♪」
「それなら、何故…大量の睡眠薬なんて飲んだの？」
「え～っ……言わなきゃ、ダメ～ぇ？」
何故か美少女幽霊は恥ずかしそうにシナを作った。
「……」
霊子が邪島と顔を見合わせてから頷く。

「……あ、あのね…」
渋々美少女幽霊が口を開く。
「…まあ、失恋したのは……ホントウ…かな……付き合っていたセンセイが居て…あ、不倫だけどね……あたし、い～っぱい、尽くしたのよぉ……おふぇら、だって…センセイに悦んで貰えるように…クラスの男子相手に随分練習したしぃ……」
「そ、それは少し問題があるのでは……」
邪島が口を挟むと美少女幽霊は、きょとん、とした顔をした。
「ん？ ……ああ…勿論、おふぇら、だけよぉ……操は守ったわ♪」
それを『操を守る』というのかどうか、突っ込みを入れようとした邪島に美少女幽霊の愉しそうな声が被さる。
「でもぉ……クラスの男子たちって まるで子供で、かっわいいのぉ♪ ……放課後になると『僕も』、『僕も』って行列ができるのよぉ♪」
「……」
顔を見合わせる霊子と邪島に、気にする素振りも見せず美少女幽霊は何人ヌキをしたの何のと自慢げに喋り続けた。
「でねぇ……ある日センセイがぁ…『もう、君とは付き合えない』って……突然言う

のよぉ！」
「……」
何となく頷き合う霊子と邪島だった。
「それで、睡眠薬を大量に飲んだら……普通、自殺って言わない？」
霊子が些か気圧されたまま訊いた。
「だ・か・らぁ……自殺しようと思って飲んだんじゃないんだってばぁ……モチロン、悔しかったしぃ…なんでフラれたのかも、わかんないしぃ……」
「……」
またも顔を見合わせる霊子と邪島だった。
「それでねぇ……確かに、ちょっと、苛ついていたのね……その夜、眠れなくって…いつものように、ひとりえっちを始めたの……眠れない時って…するよね？」
突然振られて霊子が途惑う。
「わ、わたしは……そんな、こと……」
握ったままだった《逸物》に力が入った。
「おぉう♪」
邪島が上擦った声を洩らし、慌てたように霊子は《それ》を手放してしまった。

そんな二人の様子を意味ありげに見遣って美少女幽霊は話を続けた。
「でね……最近ハマってたのが、睡眠薬でラリってする、ひとりえっち、なのぉ♪……これがまた、イイんだわっ❤」
「そ、それで……飲み過ぎた…と？」
「そうなのぉ♪……その夜は、なんていうか……さいっこうに、キちゃってぇ……あたし、三回も、イキ捲くっちゃったぁ❤」
「まさか、その度、飲んだの？」
「えへへぇ♪」
「……（えへへぇ、じゃないっつーのっ！）」
またも脱力したように顔を見合わせる霊子と邪島だった。
「……う、うん……死因は判ったわ……で？ …それが、何故、夜毎啜り泣きをするようになったの？」
咳払いを一つして霊子が思い直したように訊いた。
「啜り泣きって？」
「だから、お母さまから、夜毎この部屋から啜り泣きが聞こえると……」
霊子がレポートに眼を走らせて言った。

「んん？　……あたし、泣いたりしてないけどなあ……」
小首を傾げ、はっ、と気づいたように美少女幽霊は頬を染めた。
「もしかしたら……それって、あの声…かもぉ……きゃっ、恥ずかしいぃ……」
「あ、あの声って……あ、あんた…まさか、幽霊になっても…お、オナ…オナニーしてるっての？」
「だってぇ……あの夜の、真っ白になった感覚が忘れられなくってぇ♪」
「……」
シナを作る美少女幽霊に、またも、ただただ脱力して顔を見合わせる霊子と邪島であった。
「それよりもぉ……その、大(おっ)きな おちんちんでぇ、あたしを成仏させて(イカせて)くれるのぉ♪」
思い出したように邪島の《逸物》に視線を絡ませて美少女幽霊は笑みを洩らした。
「でもぉ、触れないんじゃ…ダメよねぇ……ちょっち、残念かもぉ…クラスの男子たちのより、センセイのより、ぜっんぜん、大(おっ)きくて硬そうなのにぃ……」
そう言いながら、邪島の反り返る《逸物》の裏筋を指先でなぞる振りをした美少女幽霊の指が止まる。

「え？……な、なに…これ……」
指先に感じた《それ》を確かめるようにまたなぞりあげる。
「ええ？……や、やだ……これって♪」
邪島の《逸物》を、しっかり、と握り締めた美少女幽霊の顔に驚きが広がる。右手で握り締めたまま空いた左手で邪島の胸を触ろうとしたが、その手は胸板を掏り抜けてしまった。
「えっ？……えぇ？……なんでぇ？」
掏り抜けてしまった左手と《逸物》を握り締めている右手とを交互に見遣って呆然とする。
恐る恐る左手も《逸物》に近づけて、ぐっ、と握り締めた。
「や、やだぁ♪……な、なんでぇ？…おちんちんだけ、触れるよぉ♪」
美少女幽霊の、ひんやり、とした指先の感触に、ぞくぞくっ、としながら邪島が尤もらしい声音で言った。
「これはね、君みたいな心根の優しい幽霊にしか触れる事のできない、ありがた～い神通棍っすよ！」
「ぷふぅっ！……おちんちん、ぴく ぴく、させてそんな事言われても、説得力ない

けどねぇ♪」
「い、いや…だからっす…ね……」
「でぇ？ ……この、ジンツウコン、から…ありがた～い、光線でも、でるのぉ？」
早くも嬲るような指捌きで《逸物》を扱きながら美少女幽霊が揶揄(からか)うように訊いた。
「い、いや…こ、光線じゃなくて……そ、その…霊験あらたかな……し、白い液体が……」
「くっ、くっ、くっ……」
苦しそうにお腹を折って含み笑ってから美少女幽霊は艶かしく邪島を見あげた。
「わ、判ったわ……くっ、くっ……つまりぃ、あたしがこのおちんちんを舐め舐めして、ゴックン、してあげればいいのね？」
「いや、だから……これは君を浄化する神通棍……」
しどろもどろで訴え続ける邪島の言葉をスルーして美少女幽霊が言った。
「うふっ❤ ……あたし、陽子……お兄さんは？」
「あっ……よ、邪島っす……」
「ヨコシマさん、ね…よろしくぅ♪」

マイペースで話を進める陽子は、ふと、気づいたように身体を起こした。
それから、腰の高さを邪島と合わせるようにして握ったままの《逸物》に股間を押しつけたのだった。
が、陽子のプリーツスカートは《逸物》を掏り抜けてしまう。
「ちぇ〜っ！……やっぱりこっちは、ダメかぁ……」
「あ、あんたねえっ！」
陽子の意図を遅まきながら理解して気色ばむ霊子に、ちろっ、と舌をだして陽子は平然と言い放った。
「だあ〜ってぇ、どうせならおまんこ、ずこずこ、突かれてイキたいじゃないっ♪……言葉どおり、逝っちゃうんだものぉ❤」
「あ、あんたねえっ!!……操は守るんじゃなかったのっ!!」
「はい、はい……お姉さんの《デカちんこ》、お借りしますねぇ♪」
陽子は、にまっ、と揶揄(からか)うような笑みを零し腰を沈めると、いきなり《邪島》を咥えたのだった。
——あむぅんんんっ♪
すぐさま、唇を窄めて吸い立てる。

――じゅるる、ちゅぷ……んふっ、ずじゅ……じゅる、じゅぶぶぶぅ……ちゅぶっ、じゅるるるっ……んん、んぐっ……んぶぅ♪

「ほへぇぇぇ♪」

クラスメートでヌキ捲くって鍛えたというテクニックに邪島が鼻の下をだらしなく伸ばして身悶える。

「おいひい[美味しい]…かはくっへ[硬くって]…じゅぶるぅ…あふくへ[熱くて]…はぶぶぅ…はまらふぁいぃ[堪らないぃ]❤」

陽子が、ちろっ、と挑むような視線を霊子に投げて、《逸物》を頬張ったまま言った。

いきなり眼の前で始まった濡れ場に霊子は退くに退けずに見降ろすしかなかったのであるが。

――はぶぅ…ちゅぶっ、ちゅぱっ……くちゅ、ちゅぷ、くぷっ……はふ、あふっ……ぢゅるるるぅ、ちゅぶぶぶぅ、ぢゅるっ……くちゅちゅ、ちゅぼっ、じゅぶぶっ……おぶぅ、んぐっ、こきゅっ♪

何人ヌキと豪語した流石のふぇらテクに、霊子は我知らず見入ってしまった。

(あ、あんな風に唇を窄めて吸うんだ……あっ、今度は裏っ側を、れろ、れろ、舐め

あげて……あっ、邪島クン、気持ち好さそう……あそこが、イイんだ……）

――れろ、えろっ、ぴちゅっ……はぶぅ、じゅるっ、ちゅろろぅ……れろっ、ちゅぴ、じゅるんんっ♪

裏筋をねぶるように舐め廻していた桜色の舌先が、今度は亀頭の薄皮を責め始める。

「おほぉあああぅ♪……そ、そこ…い、イイっ❤」

邪島が腰を震わせて上擦った声を洩らす。

「んふっ❤……これが、イイのねぇ♪……でも、まだまだ、これからよぉ❤」

艶めいた声音で歌うように言ってから、陽子は舌先を尖らせると尿道口を、ちろ、れろ、と嬲るのだった。

「ほへぇええ♪……た、堪らんっすぅ❤」

（あ、あんなトコまで…な、舐めるのぉ……あ、あそこって、おしっこがでるトコ…よね……ば、ばっちくないのかしら……）

「お、御神さんっ……そ、そんな近くで見詰められてると…は、恥ずいっす……」

「え？……んなあっ!?」

こんな濡れ場を間近に見る経験など当然皆無だった霊子は、自分でも気づかぬ内にその場に腰を降ろして、頬を桜色に上気させたまま食い入るように陽子の舌捌きを観

察していたのだった。
「あっ……わ、わたしは、別に…か、観察してた…訳じゃ……あの…そ、そう……よ、陽子ちゃんが成仏するのを…か、確認する責任があるから……」
訳の判らない言い訳をする霊子を、ちろん、と流し見て、陽子はより過激な行為に移った。
――あむぅぅふぅんんんっ♪
まるで霊子の視線から《逸物》を掠め取ろうとするかのように、鼻から息を抜きながら一呑みで根元まで呑み込んだのだった。
すぐさま、バキュームのように吸い立てる。
――んふっ、ずじゅぶっ……じゅる、じゅぶぶぶぅ……ちゅぶっ、じゅるるるっ……んん、んぐっ……んぶっ、んぶぶぶぶぅ、はぶぶぶぶっ……んん、はぶっ……じゅぶっ、じゅぶぶぶぶぅ!!
強烈に吸い立てながらも、陽子はいつの間にか自らの股間を弄っていた。短めのプリーツスカートの裾が捲れ返り、青ストライプのショーツに潜り込ませた指先の卑猥で忙(せわ)しない蠢きが、見降ろす二人の視線を釘付けにした。
(おおおっ♪……クリを摘みながらも二本の指が膣内を抉っているぅ♪……な、何

という巧みの技かーっ♪）

ぐしょ、ぐちょ、に濡れたショーツは殆ど透けている上に、横ストライプがその下で蠢く指先をアザトク描きだすのだった。

（や、やだぁ……ま、丸見えじゃないのぉ……ヘアも…あ、あそこが指に合わせて捲れるのまで……み、見えてるぅ……）

初めは霊子に当てつける心算だった陽子は、今や自らの指先が紡ぐ官能の虜になっていた。

そして、クラスメートをいたぶる時に培った恐怖の三点責め――股を大きく開いて腰を突きだし秘唇を弄る視的効果と、唇を窄め舌を絡めたバキュームふぇらに、残った掌で玉袋を揉み込んでゆく――に加えて、更なる攻撃を指先に命じたのだった。玉袋を揉む掌の先に中指を進めると、きゅっ、と窄んだ感触を見つけだす。

「よ、陽子ちゃん…そ、そこはっ!?」

上擦った邪島の声を極上の音楽のように愉しんで、陽子は、つぷん、と指先を沈めたのだった。

「くはぁーっ!!」

邪島の悲鳴とも嬌声ともつかない声音と共に、陽子の指先を強烈な絞めつけが襲い、

口腔に捕らえた《逸物》が、びく、びくんっ、と震えた。
含んだ口腔の奥深く、喉の取っつきを押し広げるように《逸物》の先端が切羽詰ったように膨れあがる瞬間が、陽子は好きだった。自分がこの男子を昇り詰めさせている、と感じた瞬間、得も言われぬ恍惚が身内を駆け巡るのだった。
（いくっ、いいい、いっくぅ、いっぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっ❤）
刹那、自ら秘芯を摘んで陽子は大きく仰け反っていた。その動きが、咥えたままの邪島の《逸物》を搾り取るように登ってゆく。
――ちゅぽおおぉおおおんんっ♪
派手な水音をあげて陽子の口腔から解き放たれた《逸物》が激しく身震いして、白濁液の放物線が陽子に降り注ぐ。
見遣れば、陽子のセーラー服は殆ど消え去り、しなやかな裸身も既に半透明に透け始めていた。その僅かに残る柔肌の色合いに邪島の白濁液が染み込んでゆく。
蕩けた笑みを湛えて伸びあがると、陽子は両腕で邪島を抱き締めた。
殆ど色の消えた身体の中で唯一桜色を留める唇が、あ、り、が、と、う、と紡いだ瞬間――陽子は黄金色の塵となって掻き消えたのだった。
「はふ〜う……」

切なげな吐息を洩らしその場にへたり込んだ邪島の肩を、ぽん、ぽん、と叩いて、霊子は「ご苦労さま……」と一言残して先に部屋を辞したのだった。

廊下に出ると、霊子は階下から心配そうに見あげていた母親に気づいて声を掛けた。

「お母さま、無事昇天……い、いえ…無事に成仏なさいました…ご愁傷さまでございます……」

そして、深々と頭を下げてから邪島を振り返った。

「さあ、帰るわよ……って、うげぇっ!?」

邪島の《逸物》は未だ隆々と反り返り天を突かんばかりであった。

「あ、あんなに、どぴゅ、どぴゅ、射精(だ)したくせに……な、な、なに、おっ勃てるのよーっ!!」

「い、いや、そのぅ……気持ち好かった事は確かに気持ち好かったんすが……何分、実体のない幽霊のフェラでは……何というか、御神さんのような生身の女の、すべすべ、した手の感触の前には…とても、とても……」

もう一度、霊子に扱いて欲しそうな顔をして邪島がにじり寄る。

「ええい、寄るなっ！ 触るなっ!! ……汚いち、ちん……その小汚いモノをわたしに

近づけるなーっ!!」
その時だった――。
「あのう……それなら、わたくしがお慰め致しましょうか？」
背後から今回の依頼主の婦人が躊躇(ためら)いがちに声を掛けてきたのだった。和服を、きちっ、と着こなした上品そうな婦人の頬は、心なし紅潮しているようにも見えた。実は、階下で待っているよう言われていたのだが、流石に気になって、こっそり、覗いていたのだった。
そして、ちら、ちら、と邪島の《逸物》に視線を投げる婦人に、霊子は面白くなさそうに答えた。
「い、いえ……いいえっ！ ……結構ですっ！」
「あの、わたくしなら、構いませんのよ……今更、初心な身体でもございませんし……そ、それに 亭主に先立たれて…謂わば……あ、そうそう…ふ、ふりい？ …と言うんでしたか…の身ですので、浮気にもなりませんし……それに、そのう、久し振りに……あ、アレを目の当たりにして……あ、いえ、その……陽子を成仏させて戴いたお礼も兼ねて、生身のわたくしなら、きっと、お役に立てるかと……」
「いいえっ!!」

しかし、霊子は断固として言い放った。
「…お礼なら、依頼料で充分ですし……こんなモノは、こうやって……ズボンの中に押し込んでしまえば、何の問題も……」
最初は触るのさえ嫌がっていた《逸物》を、むんず、と握りズボンの中に押し込んでチャックに手を掛ける。
「い、いた、痛い…痛いっす…御神さん、ま、待って下さいようっ！」
「ふ、ふん……こ、こんなモノは、ちょん切ってしまっても……ぜ、ぜーんぜん、構わないのよっ！　……おーほほほほほぅ！」
「で、では…せめて…愚かな娘を旅立たせてくだすった、ありがたいおち……お、お、お宝に…お礼の言葉だけでも……」
そう言って婦人は両手に握った数珠を擦り合わせるようにしながら邪島の前に膝を突いた。
流石にそう言われては霊子も退かざるを得なかった。少し離れて背を向けると、婦人は邪島の《逸物》に手を合わせて頭を垂れた。
「ありがとうございました……本当に、ありがたい《お宝》でございますぅ♪」
そして、念仏を唱える合間に、そっ、と舌先を伸ばし《邪島》の裏筋を舐めあげた

のだった。
「ああ、本当に名残惜しゅうございますが、わたくしがおぱんつの中にお収め致しますね……」
霊子に当てつけるようにそう言ってから、柔らかな指先が《逸物》を握り締めた。
「ああ、大き過ぎて、収まるのかしら……」
口ではそう言いながらも、本当に収める気があるのか、しきりに手首の上下運動を繰り返している。
「あうっ……も、もう…だ、大丈夫っすから……」
些か霊子が気になる邪島が自分で《逸物》を無理矢理ブリーフに収めると、最後に婦人はチャックをあげながら、艶かしい眼差しでこう囁いたのだった。
「……宜しければ今宵またお寄り下さいましね……」

*

――その夜の事。
こっそり、と忍び出ようとした邪島の前に黒い影が、ゆらり、と立った。

「何処へ行こうっていうのかしら？」
「ひょげえぇえっ!?」
飛びあがらんばかりに仰け反る邪島が、暗闇を透かし見るまでもない。コメカミに、ぴき、ぴき、と怒りマークを浮かべた霊子が仁王立ちで睨んでいた。
「ちょ、ちょっと……え、えと……あっ…こ、コンビニ…ええ、コンビニまで……」
「嘘おっしゃいっ！……判っているのよ、あの色っぽい後家さんの処に 夜這いに行く心算ね？」
「な、な、なんの事っすか？」
あからさまに動揺しながらも必死に惚ける邪島の首根っこを掴んで、霊子は事務所に引き摺ってゆくのだった。
「こっちへ いらっしゃいっ！……これは、『御神霊子除霊事務所』の信用に関わる問題ですからねっ！……見過ごす訳にはいかないわっ！」
事務所の床に引き摺ってきた邪島を放り投げると、霊子は神棚から神通棍を手に取り向き直った。
「ズボンとパンツをお脱ぎっ！」
「な、な、な……なにをぅっ!?」

流石にその剣幕にビビる邪島に霊子は言い放った。
「その節操の無い腐れちんぽこに引導を渡してあげるわっ！」
「や、その…ま、まって……」
「四の五の言ってないで さっさとだすっ！ ……って、あんた、まさか出掛ける前から膨らませてる訳ぇ！」
おず、おず、とズボンとパンツを摺り下げた邪島の股間を見て、霊子は柳眉を逆立てた。
尤も、霊子が想像した理由ではなかったのだが……。今の二人の位置関係が邪島の『桃色脳細胞』を活性化させていたのだった。つまり、床に寝転がった（正確には、『寝転がらされた』）邪島の顔の前に霊子が仁王立ちになっているのである。しかも霊子は部屋着の、ふわっ、としたミニスカートなのだ。怒りに身を震わせるたび、神通棍を振り翳すたび、その柔らかなミニスカートは、ひらひら、と捲れ今夜は薄紫のショーツが、ちら、ちら、と見えるのである。モロ見えより、えっちい、シチュエーションに邪島の《逸物》は正直な反応を起こしていたのだった。
しかし、そうとは知らない霊子は、あの未亡人に欲情しての事だと勘違いして怒り心頭であった。

「あ、あ、あんたの腐れちんぽこを粛清するのなんて、これで充分よっ!!」
そして、足を高くあげて邪島の《逸物》を踏んづけたのだった。
「ひょげえぇえええっ!?」
派手に捲くれるミニスカートと《逸物》を直撃する小さな生足裏の感触に、邪島の喉から痛みと官能が交錯する悲鳴があがったのだった。
「あふうぅうううっ♪……で、でも…ちょっと…イイかもぉ……」
「ぬあんですってーっ!!」
踏んづけた足裏を持ちあげられる感触に、霊子の怒りが沸騰する。
「こ、この、この、このぉっ!!」
足を持ちあげるたび（つまりスカートが捲れるたび）邪島の官能に火を点けているのも知らず、霊子はまるで邪島の身体を跨ぐような体勢で《逸物》を踏みつけ続けたのだった。
「こ、この……へ、変態っ!!　スケベっ!!　色情狂っ!!　く、腐れち、ち、ちんぽこっ!!　ご、後家殺しぃっ!!」
チラ見え処か、モロもモロ、ショーツのレース模様はおろか股間の、こんもり、とした膨らみが霊子の動きに合わせて、ぐにゅ、ぐにょっ、と形を変える様まで見通せ

て、邪島の『桃色脳細胞』は壊滅寸前であった。

――その夜、御神霊子除霊事務所に時ならぬ狼の遠吠えのような咆哮が長く切なく続いたとか……。それが、断末魔の悲鳴だったのか、それとも歓喜による雄叫びだったのか、後々、霊子がその話題に触れる事はなかったのであるが……はて、さて。

申し訳ありませんが体験版はここまでです。
こちらの体験版にて、作品の雰囲気や霊子と邪島の馴れ初めなどをご確認戴けたらと思います。
『美少女除霊師は若葉マーク❶』の本篇には 更に次の二つのエピソードを収録しています。
「Report 3. 依頼殺到、嬉しい悲鳴？」では、除霊相手のマダム幽霊と霊子の身体がシンクロして大変な事に……。
「Report 4. 初体験のお相手は？」では、『お●ヌちゃん』に似たキンキン声の巫女服幽霊マリ子が登場。邪島と初体験（？）を……。

そして、『美少女除霊師は若葉マーク❷』の本篇には 次の四つのエピソードを収録しています。

「Report 5.　けしからん膨らみ？」では、９６センチＦカップのけしからん膨らみを持つ女子校生幽霊の除霊の依頼が。処が彼女は実は男の娘(こ)で……。

「Intermission 1.　深夜のヒミツ特訓!?」では 霊子が邪島相手にフェラチオの特訓をする破目に……。

「Report 6.　海水浴場で３Ｐ？」では、美少女幽霊をナンパした邪島が話を聞いてやると、彼女は輪姦(まわ)されたあげく絞め殺されて、錘(おもり)を括りつけられて海に棄てられた可哀想な境遇だった。ならば、と彼女を除霊しようとした邪島は、しかし、失敗してしまう。実は彼女は《ふたなり》だったのだ。そこで、霊子が彼女の《男の子》を、邪島が彼女の《女の子》を同時にイカせるべく共同作業に……。

「Intermission 2.　エスカレートするご褒美!?」では 要求をエスカレートさせる邪島に霊子がパイ擦りの特訓をする破目に……。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。